

応態理計学・OR・運籌学

上田イノベーション研究所 上田 亀之助

1. これからのOR

「これから どうなる？」を扱うのが未来学だとすると、「これから どうする？」を達成させるのはオペレーションズ・リサーチの役目だと思っております。つまり、これから先のある時点で何かをうまくやりとげるために、今日ただいま何を調べ・何を考え・何をまとめ・何をどのように行なったら一番のぞましいかを考えて実行に移すために、それにふさわしいオペレーションズ・リサーチするのですから、ORの実行に当り、その目的をなしとげるために必要と思われる手段や方法などは、それが妥当であるかぎり、使わせていただけるものと思っております。

また、「一寸先は闇」とも言われておりますように、われわれは未来についてはきわめて無知です。そのうえ、すべてのモノゴトは既知の法則ばかりでなく、未知・未発見の法則にも常に支配されておりますので、未来のオペレーションズ・リサーチを考える場合に、現在わかっていることだけで問題の解決をはかりますと、それは見かけのうえではなかなか格好よくまとまっていて合理的であるかのように感じられますが、後になってみますと、いろいろとあらが出てくるかもしれません。

また、オペレーションズ・リサーチが取り扱う現実や問題や対象は、いくら細かく分析しても、分析しつくし得ないようなきわめて複雑なモノゴトが多く、しかも常に変転きわまりないのですから、あまり簡単に割りきって片づけるのも、好ましくないような気がします。

現実とは、一般にあって、なかなか複雑で、しかもその全容をつかむことは、ほとんどの場合、とてもむずかしいことのようにです。

ジョン・メイナード・ケインズは「最高の形態における経済学的解釈にとって必要なのは、論理と直観の混合ならびにその大部分が正確でない事実の広範な知識である」というようなことを言っておられますが、オペレーションズ・リサーチの実行においても、やはり、これと似たようなことが考えられるのではないのでしょうか。

また、既知のモノゴトについては論理をたてることは可能かもしれませんが、いまだ存在していない「これから」については、はっきりとはわかっていないのですから、論理をたてることはきわめてむずかしいことだと思っております。

いうまでもなく、これからの何かを行なうに当っては、つとめてそれを論理的に扱うことは重要な要件のひとつです。しかし、なかなか論理とか筋道を通すことはむずかしい場合も多いということも認めざるをえません。ですから「これからのOR」をこなすためには、論理的でないことも、不本意ながらある程度とりあげて考えに入れ「清濁あわせのむ」の忍耐力の涵養も必要になってくると思います。そして「これからのOR」では、時にはかなり格好のよくないことも我慢して採用しなくてはならない場合が相当あることを覚悟する必要がありますような気がします。

「これから」には：将在(まさに在らんとする)・将来(まさに来たらんとする)・未在(いまだ在らず)・未来(いまだ来たらず)の四態が考えられますが、そのうちの未在と未来は現時点ではどうもあまりはっきりしないのがその生態だと思っております。

そして、未来に対しては「予測」が、未在に対しては「創造とか人間の行動による生産とか建設とかコミュニケーション(通達感化・反応)等が対応する」と言えるかもしれません。「これからのOR」の活動領域はまさに、このあたりのような気がします。そんなわけで、ORの活動領域はますます広大となり、音楽の作曲や女性のファッション

ンにも応用されると考えております。

2. 運籌学

中国では現在オペレーションズ・リサーチのことを「運籌学」と称しておる由です。この用語は中国の正史において「史記」につぐ第2の書である「漢書」の「高帝紀」にある「運籌帷幄之中，決勝千里外（はかりごとをいばくの中にめぐらして 勝を千里の外に決す）」つまり、いながらにして遠くはなれた敵国をはかって、必勝の策をたてたという漢の張良の故事によったものだそうです。

なおこの「漢書」は前漢の歴史を記した書で、後漢の和帝の命により、兄の班固の後をついで、その妹で才女のほまれの高い班固（AD40～AD115）がまとめあげた正史で、正史の第1である司馬遷の「史記」につぐ名文であるといわれております。

なお、この「漢書」はわれわれにとってなじみの深い名文句の源でもあります。たとえば、「酒は百薬の長」「王侯将相いづくんぞ種あらんや」「多々ますます弁ず」「実事求是の学」「農は天下の大本なり」「前車のくつがえるは、後車のいましめなり」「人生はあしたの露のごとし」「人生は行楽せんのみ」「天に応じ民にしたがう（天命と人道とによって事を行なう。それが真の王者のとるべき道である）」等々。

3. 応態理計学

オペレーションズ・リサーチという外来語は、この頃ではすっかり熟したコトバになり、十分通用しておりますが、カタカナ書きしますと少し長すぎるような気がします。そこで英語よりも千年以上早く日本に入ってきた、よりなじみの深い漢字を使って、しかも頭文字のOとRをそのまま生かせる和製漢語の造語を試みてみましたところ、「応態理計学」なる漢字の組合せを見つけだしました。そこで、検討のため、応・態・理・計という4つの漢字の原義を「角川字源辞典」などによ

り調べてみました。

「応」：心で相手のいうことを受け入れる。

「態」：心の善美なこと，才能・賢能の能の本字。借用として：すがた・ようす・ありさま・形態。

「理」：玉(ギョク)の筋模様・紋理。意味の延長として：「玉器をつくる」となり、「おさめる」の意となった。用例：理事・管理。

「計」：口で読みあげて数をまとめる，かぞえるの意。延長としてはかる・相談する・処理する・考え（計画・設計）

というようなわけで、「応態理計学」とは、「それぞれの現実をよく観察して，理解して，それにふさわしい計画や案をたてて政治・経済・経営・管理の実行に貢献する学」というような気持の熟語のつもりです。

人はみんなそれぞれ異なった価値観をもっており，社会現象のほとんどは「一事不再起」だといわれております。でも，それにもかかわらず，すべての人々に共通した暮らしのあり方とか，モノゴトの考え方もないわけではありません。たとえば，

- ①一家安全・商売繁昌・無病息災・不老長寿
- ②心は楽しく・豊かに・健やかに・美しく
- ③行は仲良く・より良く・新しく・張りきって

そして，それらがうまくゆくようにするために：古き良きものを保ちながら・日に日に新たに創新(創造と更新：イノベーション)を行ない，入手できる資源を十分に活用して・いかなる環境においても自分を失うことなく積極的に適応する。そのためには，モノゴトの原理・原則・法則・基礎知識をよくわきまえて「応態理計学：OR」を活用して，いつ何が起きても，

臨機応変・当意即妙・自由闊達・融通無礙で，時空超絶・縦横無尽・気宇壮大・細心綿密に行動して，経済順調・政情安定・六合塵静・世界平安と，楽天・楽土を築きましょう。